

新潟県佐渡市稲鯨集落におけるお祭りの参加とその映像化

7年後の再訪と学生同伴の予備調査について

杉本 浄

Participation in the Annual Festival of the Inakujira Community, Sado,
Niigata Prefecture, Japan, and the Attempt to document it on Film

On Revisiting the Festival Seven years later
and the Preliminary Research with Students there

SUGIMOTO Kiyoshi

0. はじめに

現在、日本の地域コミュニティは、過疎化に加え、高齢化と人口減、さらにコロナ禍に直面する中で、益々弱体化の傾向にある。そのことは、集落の核にあったお祭りの縮小化に如実に現れている。本研究が対象とする稲鯨（いなくじら）のお祭りもまた例外ではない。

稲鯨集落は新潟県佐渡市の北西部の海に面した比較的大きな集落である（図1）。毎年、8月25日には北野神社の祭礼である、通称、稲鯨祭りが執行されてきた。高度成長期までは漁業を生業にする者が多く、その名の通り、その昔は鯨漁を行っていたとされる（図2、図3）。令和2年の国勢調査によれば、世帯数は182、人口は352人である。その内、就業者は178人で、漁港はあるものの、現在、漁業を専業にしているものはわずか8人で、4分の1はサービス業に従事し、建設業や事務職などがそれに続く。かつては冬季の出稼ぎ者も多かったが、現在は旅館や建設会社があり、また公務員も多く、出稼ぎ者は減少した。

アジア学科の前身である文学部アジア文明学科の学生たちが、この集落の稲鯨祭りの映像を撮りため、15分ほどの映像資料として編集したのは、10年前の2014年度から2015年度にかけてのことだった*¹。学生たちは、集落の総会だけでなく、佐渡市の催しにおいて、祭りの映像を披露し、さらに、祭りでの経験について発表する機会を得た。その後、集落の人々の意見をもとに修正した映像はDVDに記録され、お世話になった方々だけでなく、佐渡市の各図書館にも現地NPO法人を通じて寄贈された（図5）*²。

それから10年が経過する中で、集落のお祭りは、引き続き高齢化と人口減に加え、コロナ禍もあって、一層の縮小化が進んでいった。こうした厳しい現実直面しつつも、集落の人びとはどのように折り合いをつけて、祭りを継続しようとしてきたのだろうか。こうした疑問を元に、アジア学科の学生たちと共に、2024年度から2025年度の2年間をかけて、祭りを再び映

像に収めるプロジェクトを立ち上げることにした。

本報告では、この映像プロジェクトの 1 年目に実施された予備調査について簡素にまとめ、2 年目の見通しについて検討する。



図 1 佐渡島と稲鯨集落の位置（国土地理院が公開する地図に加筆）



図 2 稲鯨集落（西、中村）と漁港（2014 年 5 月 3 日：筆者撮影）



図 3 稲鯨位置とその周辺（国勢調査町丁・字等別境界データセットに加筆）



図 4 稲鯨祭りの神事が執り行われる北野神社（2024 年 5 月 2 日：筆者撮影）



図 5 2016 年に完成した DVD（2024 年 5 月 15 日：筆者撮影）

1. 前回の映像プロジェクト

今年度の活動についてまとめる前に、2014 年度から 2015 年度に行われた稲鯨祭りの映像プロジェクトを簡潔に振り返りたい。2014 年より東海大学の映像班は、首都大学東京（現 東京都立大学）と武蔵大学の学生たちの調査と連携しながら、祭りの事前準備から本祭、さらに片付けに至るまでの過程を映像に収めた。この映像調査は、NPO 法人佐渡芸能伝承機構の協力を得て実施された。機構からは、主に地元の総代（区長の別称で、祭事に関わるため地元ではこちらが主に使用される）や自治会、地元青年団との橋渡しをしてもらった。

2015 年度は、お祭りの催しよりも、前年に撮れなかった家庭の中の様子や、祭りを執行する総代や書記といった、集落の役員に対するインタビューを中心に撮影した。また、前年度にはできなかった、学生たちが各組の門付けに参加することも試みられた。こうして、2 年分の撮りためた映像を編纂して、2016 年 2 月 6 日と 7 日には佐渡市の招きで、映像を披露することになった。初日はお世話になった稲鯨集落でまず公開し（図 6）、2 日目は佐渡市の施設である

佐渡中央会館で、地域活動報告会の中で披露された。この時、映像だけでなく、講演会（筆者）、首都大学の学生による調査発表、座談会「大学生にとっての佐渡」が行われ、さらに会場後方には、パネル展示も用意し、訪れる方々に見てもらった*3。稲鯨からも役員をはじめ、集落の人たちが会場に来てくれた。この日の夜は、稲鯨集落内で打ち上げ会が開かれ、学生 5 名に加え、アシスタントとして活躍した大学院生、筆者を含む教員 3 名が招かれた。



図 6 稲鯨集落での総会後に開かれた発表会の様子（2016 年 2 月 6 日：小西公大撮影）

2. 新映像プロジェクトの予備調査実施までの過程

今回、稲鯨祭りの映像化を再度挑戦することになったきっかけは、かつてお世話になった NPO 法人の理事長からの声掛けもあったが、前回の映像編集の中心メンバーだった学生たちと、その後も継続的に祭りの撮影を行い、10 年後を目標に映像を撮りためようとしていたことが大きかった。2016 年と 2017 年に祭りを撮影した学生たちは、一部ではあったが、2018 年夏に再び稲鯨祭りを訪れ、中村組の門付け（太鼓組）に参加し、映像も残している。

しかし、2018 年度後半からは、さどの島銀河芸術祭に出展するといった、新たな企画に注力するようになったこともあり、学生の稲鯨祭りへの参加は 2019 年度には途絶えることになった*4。さらに 2020 年から 2022 年の 3 年間は、新型コロナウイルスによる規制があったため、祭り自体も中止になった。2020 年 8 月下旬に、ただ一人、佐渡で調査を実施した筆者は、祭りの日の 25 日に稲鯨を訪れ、偶然、道端で出くわした旧知の方に話をうかがった。彼によれば、神事を含め、祭りが中止になったとのことだった*5。その後も断続的に佐渡での調査のたびに稲鯨を訪れたが、交流自体は途絶えてしまった。2023 年に復活した稲鯨祭りだったが、かなり縮小する形で実施されたことを、人づてに聞いただけで、再度訪れることはなかった*6。

しかしながら、こうした思わぬ中断があったものの、稲鯨のことは頭から離れたことはなかった。祭りの撮影を再開しようと決意したのは、2024 年 3 月の佐渡調査中のことだった。佐渡市役所の職員でもある、稲鯨の知り合いに電話し、集落と祭りの現状を聞くとともに、総代を含む役員の構成がどうなっているのかについても尋ねた。さらに、旧知の元市議会議員の方にも再度撮影に入りたいと電話した。

こうして稲鯨集落の現在の総代と書記の方に、稲鯨公民館でお会いできたのは、2024年5月2日のことだった。その際、祭りの現状がどうなっているのかをまず聞いた。総代によれば、神輿の還御である「おけいり」は無くなり、集落の東西2か所にある御旅所での儀礼を終えて、午後早くに神社に還ってくるという。

稲鯨祭りの華と言え、この「おけいり」の際の、神輿の進行を阻む青年団と、神社へ還ろうとする神輿との競り合いであり、青年団が気合を入れる木遣りの響きだった（写真7）。新型コロナウイルス対策もあり、残念ながら集落の合意でこの競り合いは取りやめになった。集落の現状を考えれば、深夜までかかる「おけいり」は、年々人手が少なくなる中で、続けることは難しかった。10年前の調査においても、祭りのやり方をめぐる議論が数年前からあったことが確認されており、毎年のように祭りの実施に際して、集落の人々が現実的な方策を模索していた。総代によると、祭りの各種行事を取りやめることについては、各家にアンケートを配って、それらの意見を集約して、総会で決めたことだったという。



図7 「おけいり」の様子（2017年8月25日：筆者撮影）。神輿が北野神社に還る際に、各組を通る道にそれぞれの組の青年団が出てきて、提灯を片手に神輿の進行を防いだ。10名前後の青年団は、各組にいる木遣りの名手が歌う歌に合わせて、合いの手を入れる。木遣りが歌われる間は、神輿は進まないルールになっており、歌が終わると青年団は進もうとする神輿組と競り合う。その激しさから、稲鯨祭りは喧嘩祭りとして、他の集落から一目置かれた。神輿が北野神社に還るのが、明け方になる年もあったという（2016年8月25日：筆者撮影）

稲鯨集落は普段から5つの組に分かれて、自治会活動が行われている。西から砂原、西、中村、東、新田である（図8）。祭りの際には神社だけでなく、以前は各組の旧道には立派な幟が立てられたが、北野神社と大神宮前の幟以外は組の負担が重いため、現在では取りやめになったところが多いとのことであった。また、青年団による各家々を回る門付けに関しても、縮小のための整理が行われた。砂原と西は別々に、「たな」（屋台）を出していたが、長い間の議論の結果、コロナ禍以前に合同で門付けをするようになった。とはいえ、太鼓組を担当する中村と東は、現在でも別々に門付けをする。新田は獅子組であるが、ここは青年団が少ないため、

砂原などからの手伝いが加わって、門付けを行う。



図8 集落の地図と5組のおおよその位置。海岸沿いに家々が張り付いるが、海岸段丘上に県道のバイパスができると、その周辺に家を建てるようになった（国土地理院が公開する地図に加筆）

さて、5月2日のミーティングでは、役員に対して、集落での撮影を許可してもらえよう、お願いしに訪れたのだが、この砂原と西の「たな」で踊る踊り手がいまだ決まっていないことが話題になった。近年、日本舞踊の方を島内から3〜4名を招いて、門付けを行ってきたが、夏の気温の上昇と踊り手の高齢化により、引き受けてくれる人がなかなか探し出せないのだという。さらに、踊る際に使う舞台は移動がしやすいように、トラックを借りて、その荷台を舞台としてきたが、飾りつけるのもひと手間になるのだという。かつて威勢のいい頃の稲鯨祭りでは、新潟市から芸者さんを多数呼んで踊ってもらったとのことだった。

一通り話を聞いて、筆者がふと思いついたのは、昨年（2023年）の夏に、佐渡の研修に来た女子学生が、日本舞踊を習っていたことだった。そこで、この学生と同門の人たちを呼んで、踊ってもらおうのはどうだろうかと提案した。総代は、それは面白いというので、とりあえず筆者が佐渡から帰ったら、その学生に大学で聞いてみるということになった。

3. 祭りの参加と撮影にむけて

こうして、5月調査から帰り、まず「たな」の踊り手候補の女子学生に声をかけた。幸い快諾してもらい、本人が稽古をつけてもらっている教室の門下生2名に、祭りで踊ってもらえないか、聞いてもらうことになった。さらに、個別に学生たちに声をかけて、祭りの参加と映像プロジェクトについて説明して、参加を促した。結局、3名の学生から快諾を得た。踊り手を含め、参加するアジア学科の学生4名はいずれも3年生で、2023年8月下旬に、研修のため佐渡を訪れたメンバーだった。この研修は、2023年度のサマーセッション科目「アジア研究プ

プロジェクト A」において実施された。佐渡に移住した人たちの活動に注目し、実際にお話をうかがうという 3 泊 4 日の研修だった。この時は主に南佐渡を訪ね歩いた*7。

その後、踊りについては、6 月の Zoom 会議を経て、依頼した学生と同門の社会人 2 名の計 3 名が祭りの門付けに協力してくれることが決まった。さらに 7 月に入り、地元の青年団長との具体的な祭りでの段取りが、主に「たな」について話し合われ、団長を通じて、「たな」を担当する砂原と西の青年団との間では LINE を通して情報を共有することになった。大きな追加事項は、「たな」の踊りに、地元の七浦小学校の女子児童が加わるようになったことだった。

以上の準備が進む中で、新たな作業が加わった。佐渡での学生の滞在や活動に対して補助金が佐渡市より得られるので、応募するようにとの依頼だった。これは佐渡市が企画する「令和 6 年度大学と地域が連携した地域づくり応援事業補助金」のことで、大学生が集落に入り、地元の人たちと共同で何かしら企画を立案し、実施する事業に対し、参加学生の佐渡までの交通費と島内での宿泊費と交通費、その他の諸経費を範囲に、総経費の半額を補助するものである。すでに指定書類が佐渡市よりメールで送られてきていたが、当初は申請しないつもりだった。この補助金は地元での成果発表を比較的短時間で行うなどの縛りがあり、映像を撮るというプロジェクトの性質上、ふさわしくないと考えた。とはいえ、青年団とかかわりながら、「たな」などで祭りの一端を担う部分では、こうした補助金の趣旨に合致しているところもあり、しかも学生の補助にもなるため、7 月頭に必要書類を記入して佐渡市に提出した。その後、しばらくしてから受理されたことを知らせる連絡があった。

さて、参加学生にも伝えた肝心の祭りの撮影について触れたい。前回の映像プロジェクトでは、稲鯨祭りの一連の過程を満遍なく記録するドキュメンタリーが目指され、実際にそうした内容として撮りためた映像を編集した。今回は冒頭にも記したように、少子高齢化に加え、コロナ禍といった厳しい現実と直面する中で、集落の人びとは既存の祭りのやり方を、どのように折り合いをつけて、継続しようとしているのかに注目する内容に仕上げることを目標に掲げた。そのため、今回の予備調査では、そうした住民同士の話し合いや祭りの執行時の運営に関する映像をとのよう撮ったらいいのかを模索することにし、とりあえずは稲鯨祭りの現在を、前回と比較できるように、儀礼、門付け、祭りの様子を 2 台のカメラと学生のスマートフォンを使って記録していくことにした。とはいえ、初年度の予備調査であるため、役員、青年団、さらに住民とのコミュニケーションが撮影より重んじられた。

4. 参加と撮影の実際

以上の準備を経て、8 月 22 日～8 月 27 日の 5 泊 6 日の日程で、佐渡市相川地区にあるゲストハウスに滞在しながら、10 キロほど先にある稲鯨に通った。以下、スケジュールに沿ってまとめていく。初日の 22 日に学生たちが佐渡入りし、食料などの買い物をしてからチェックイン。オーナーに挨拶し、夕方 5 時過ぎに、稲鯨集落の総代と書記がゲストハウスを訪ねてきてくれた。すぐに、滞在中の日程について確認し、祭りの執行予定などについて話し合った。

23 日は、午前中に稲鯨に行き、青年団の団長と西組の取りまとめ役と野外で会い、主に「た

な」の門付けについて話し合った。団長より、祭りの進行内容について一通り説明を受けた後、門付けの場所を確認するために、車で集落を回った。まだ、決まっていないところについては、団長と団員の間で話し合いが行われ、時に電話をしながら、一つ一つ手順を決めていった。最後に当日の休憩場所や着替える場所など、細かな説明を受けた。午後は稲鯨に近い、その昔、獲れた魚を売りに行ったとされる、相川の街の中心部に出かけた。まず、佐渡金山のガイダンス施設、「きらりうむ佐渡」を訪れ、7月末に世界遺産に決まった相川地区の佐渡金山および西三川の砂金の歴史について学んだ。

それを踏まえて 24 日の午前中に、実際に佐渡金山を見学した（チケットは周遊型のものを購入）。午後は踊り手 2 名（いずれも社会人）が到着するため、両津ふ頭に迎えに行った。踊り手 3 名の案内については青年団長にお任せし、映像班は買い物などをしてからゲストハウスに戻った。紆余曲折もあったが、「たな」の踊り班は一端ゲストハウスで着替えてから、予行演習のため稲鯨公民館に出かけた。ここで大雑把な踊りの流れを確認し、総代と書記を交えて話し合った後、明日の日中に神輿が各組を渡御する順路を確認してから宿に戻った。

25 日は朝 5 時には起きて身支度を終え、朝食を食べてから稲鯨へ向かった。踊り手 3 名は青年団に迎えに来てもらった。7 時に北野神社に行って、青年団の 5 組の門付けの無事を祈願する神事に参加し、早速撮影に入った。続いて撮影班は集落の西側にある、もう一つの重要な大神宮での神事を撮影した。その後、青年団長の指示をその都度得ながら、門付け中の太鼓 2 組、獅子舞、「たな」を追って撮影した。

9 時過ぎに「たな」の門付けの踊りが、西組の旧道ではじまった（図 9）。以前よりも見物人が多く、好スタートが切れた。女子児童の親たちが集まり、子供たちの世話に追われたが、そうした騒然とした雰囲気は、祭りの活気にもなった。子供たちの踊りは「花笠音頭」と地元の「七浦甚句」の民謡で、元保育園の先生が、事前に七浦小学校で教えてくれていた。気温も高く、体力的にもきついため、子供踊りは午前と午後の 2 班体制だった。後述するように、砂原での最後の踊りに際しては、2 班（10 名）がそろって出てきて、会場を沸かせた（図 10）。その一方、学科学生 1 名と社会人 2 名からなる、大人の日本舞踊チームは、さすが師範の免許状を持っているだけあって、手先まで意識した美しい踊りを披露してくれた。夕方までに 20 か所以上で門付けをして回った。



図 9 最初の門付け先で踊る大学生の I さん 図 10 最後の門付けの様子（2024 年 8 月 25 日：筆者撮影）

話を前に戻そう。大神宮での儀礼の後、猿田彦が登場し、神輿が進む道を清めた。10時半過ぎに神輿の渡御が開始された。途中の坂で撮影班3名がこれに参加(図11)。神輿は2か所の御旅所を回って、13時半までには、予定通り神社にあっさりと還御した。また、15時を過ぎる頃に、突然の雨が降り始めた。門付け中の各組はそれぞれ雨対策をし、時に順番を変更するなど、臨機応変に対応していった。以前、「たな」は踊りを披露しても見物人は少なかったが、今回は行く先々でそれまで以上の人たちに集まってもらった。先述したように、砂原での最後の門付けに関しては、これまでにない大勢の集落の人たちが集まった(図12)。若手の日本舞踊の踊り子と地元の女子児童の組み合わせは、集落の人たちにとってかなり新鮮だったようである。児童の親御さんから、稲鯨祭りがこれまで「おけいり」を中心とする男の祭りで、女の子たちは外に行かず、家で過ごしたものだ。祭りに来るお客さんのお手伝いをすることも多く、自分の子供が祭りで踊れるようになって、本当にうれしいと語っていた。「たな」は、夜の「おけいり」とは違った、祭りの新しい華になったのだった。



図11 坂道で神輿の渡御を手伝う学生たち(2024年8月25日:学生提供)



図12 砂原での最後の踊りの様子(2024年8月25日:筆者撮影)

門付けが終わり、青年団長の家に集まってごちそうをいただいてから、宿にもどった。翌26日は西組の青年団員のお世話で、学生たちは相川周辺を見学して回った。その後、16時半に稲鯨

公民館で、お世話になった総代、書記、青年団長、西組の代表らが集まり、学生たちが稲鯨祭りに参加した感想について発表し、皆で意見交換を行った。夜は相川の街へ行き、青年団の打ち上げに参加した。

最終日の27日は、ゲストハウスの後片付けをしてから両津ふ頭に向かい、そこで解散した。

5. おわりにー予備調査から見えた課題と今後

以上述べたように、今回は、「たな」で踊る踊り手が島内で見つけられないことから、学科学生とその仲間2名が日本舞踊を祭りで披露し、これに子供会のお世話で地元の七浦小学校の女子児童が民謡を踊ることで、奇しくも新たな祭りの形を地元の人びととの間で創発することになった。この試みは地元で好評を得たと聞いているが、当初は撮影だけを考えていたため、想定していない催しだった。集落の役員、西と砂原の「たな」を担当する青年団の人たち、そして子供会のお母さんたちの祭りに対する想いが、こうした事態を引き寄せてくれたのだろう。

映像班の3名の学生は、映像を撮りながら、神社での儀礼、獅子舞や神輿の渡御にも加わり、集落の様々な人びとと交流した。学生たちは、稲鯨祭りのような、人と人との繋がりを再確認するような祭りははじめてのことだと述べており、地域社会の相互協力関係について多くを学んだに違いない。企画した側である筆者にとっては、前回のプロジェクトで、学生が祭りに参加しながら、撮影を行うやり方について再度検証できたことは大きな収穫であった。

その一方で最大の課題と考えられたのは、映像プロジェクトの企画や運営に際して、学生たちが全く「お客様」に終始したことである。予備調査の期間だけでなく、準備から何一つ、学生たちの企画やアイデアを引き出し、実現することができなかった。映像についても、何ら学生からのアクションがなく、スマートフォンで撮った各自の映像もいまだ集まっていない。

この点を前回のプロジェクトと比較して考えたい。前回、撮りためた映像は学生による編集を経て、何とか完成し、展示会や発表会において披露された。この点から、学生の教育実践の場として、確かに意義があったと認められよう。ただし、映像プロジェクトに自ら積極的な意義を見出し、編集作業に労を惜しまなかった学生は一人だけだったことも指摘されてよい。その学生は、映像がきちんと完成できないと、お世話になった「稲鯨の人たちに大変申し訳ない」という気持ちで、慣れない映像編集に自分を向かわせたのだと繰り返し述べていた。他に当初から映像編集の責任者として指名されていた学生やナレーションを担当した学生もいたが、熱意の部分では彼の足元にも及ばなかった。そう考えると、映像の完成は薄氷を踏むような歩みだったことになる。また、前回のように、他大学の雰囲気異なる学生たちと寝食を共にしながら、調査のため一緒に行動することの意義は大きかったと考える。交流の中で、その都度、自分たちが何をすべきかについて、学生自らが問い、見通しを立てて動いていたのだった。

映像が完成しないリスクと内輪に留まることのリスクを抱えながらも、来年度の映像プロジェクトでは、参加希望の学生を交えた事前の議論が重要になる。今回のように予備調査が人任せにならないような工夫とは何なのだろうか。敷かれたレールがないと、学生たちが動かないという事態を回避するにはどうしたらよいのか*8。今年度の映像班は解散になるが、新しく編

成するチームに、今回の教訓を活かしつつ、学生が自ら動けるようなチームづくりを模索していきたい。

註

- *1 東海大学に焦点を当てた佐渡での実習については、杉本（2015, 2019）を参照されたい。
- *2 共に調査に入った首都大学東京（現 東京都立大学）の社会人類学分野の学生たちが書いた調査報告は小西公大、吉村竜、戴寧（2015）。
- *3 この時の発表会を含め、一連の映像プロジェクトについては、簡素ではあるが杉本（2019）を参照されたい。発表会について若干補足すると、首都大学からは2名の学生が登壇した。1名は人びとの土地の愛着に注目しながら稲鯨祭りを分析した。もう1名は祭りの組織と運営、さらに祭りの執行に関する集落内の議論に注目しつつ、集落の将来像を検討した。発表内容はいずれも註2の報告書に基づくものだったが、調査研究と東海大の映像とが補完関係にあったことは重要である。調査から成果発表まで、各々の大学の学科や専攻の特色を活かしながら連携できた点で、稲鯨での調査実習は画期的なものであり、その後の見本にもなった。
- *4 さどの島銀河芸術祭は2016年にプレイベントがスタートし、翌2017年より本格稼働した新しい芸術祭である。「過去と未来の帰港地」を基本理念に置き、8月半ばから11月上旬の3か月の間、島の各地でインスタレーションや各種イベントを展開してきた。3年に1度の本祭（トリエンナーレ）を基本とするが、その間の2年も規模を小さくしながら実施してきた。詳細は芸術祭のホームページ(<https://sado-art.com/>)を参照されたい。なお、筆者は2019年、2021年、2022年に、空き店舗での展示やアートツアーの企画に関わった。
- *5 2020年夏のコロナ禍での佐渡調査については、杉本（2021年）。
- *6 こうした背景には、「生活文化研究フォーラム佐渡」の名の下で、さまざまな活動を取りまとめていた大学横断型の調査実習や各種プロジェクトが、新型コロナウイルス対策の規制により、事実上、中断したことがあった。筆者も現実的に実施可能な史料調査や故人の手書き資料のデジタル化に注力した（杉本：2022a, 2022b）。この間、フォーラムとしての活動は、以前の調査成果を用いた写真展「宮本常一写真で歩く佐渡」や報告書の作成ならびに、さどの島銀河芸術祭での出展や企画に留まる。コロナ禍が落ち着くと、筆者は移住者研究をスタートさせ（杉本：2023, 2024）、フォーラムの中心メンバーは、それぞれの活動にシフトした。研究拠点として使用していた、稲鯨に近い「二見ハウス」が、2022年12月末をもって閉鎖したことも、稲鯨での撮影が途絶えた大きな要因の一つになった。
- *7 この時の研修については、杉本（2024）の研究ノートに掲載した論末の付録（該当ページは123-134）において紹介している。
- *8 コロナ禍を経て、こうした人任せの傾向が教育現場で強まったことは、自身の経験だけでなく、周囲の指摘に基づくが、より緻密な方法論からこの傾向を検討する必要がある、今後の課題としたい。

参考文献

小西公大、吉村竜、戴寧 編

杉本 淨

2015『非日常性と〈つながり〉の社会誌－佐渡・稲鯨集落における祭礼調査から－』首都大学東京
都市教養学部社会人類学分野

杉本淨

2015「廃校プロジェクト佐渡夏期調査の5年間－東海大学班の活動を中心に」『東海大学紀要文学
部』第103号、pp. 69-81.

2019「佐渡島での夏期調査報告（2017年）」『東海大学紀要文化社会学部』第1号、pp. 131-143.

2021「コロナ禍の佐渡調査」『生活文化研究フォーラム』第2号、p. 89.

2022a「1962年の林道明－宮本常一招聘をめぐる資料とともに－」『生活文化研究フォーラム』第
3号、pp. 28-42

2022b「民俗博物館設立運動の記録－林道明氏史資料保存プロジェクトの経過報告－」『東海大学紀
要文化社会学部』第7号、pp. 93-99.

2023「学校の廃校と廃校の学校－新潟県佐渡市旧大滝小学校の変遷を事例に－」『東海大学紀要文
化社会学部』第9号、pp. 1-30.

2024「地方への移住と複業による暮らし－新潟県佐渡市を事例に－」『東海大学紀要文化社会学部』
第11号、pp. 109-134.

Web 資料:

国土地理院

佐渡島および新潟市部分（稲鯨集落の図示は筆者）

<https://maps.gsi.go.jp/#11/37.988316/138.641281/&base=std&ls=std&disp=1&vs=c1glj0h0k0l0u0t0z0r0s0m0f1>（2024年12月10日最終閲覧）

稲鯨周辺（各組の場所の図示は筆者）

<https://maps.gsi.go.jp/#16/37.966827/138.238649/&base=std&ls=std&disp=1&vs=c1glj0h0k0l0u0t0z0r0s0m0f1>（2024年12月10日最終閲覧）

さどの島銀河芸術祭ホームページ

<https://sado-art.com/>（2025年1月22日最終閲覧）

生活文化研究フォーラム佐渡「これまでの活動 2008年～2020年」

<https://sites.google.com/view/forum-sado/>（2024年12月10日最終閲覧）

農業集落境界データセット「稲鯨」

<https://geoshape.ex.nii.ac.jp/ma/resource/15/1522410004.html>（2024年12月12日最終閲覧）

令和2年国勢調査 小地域集計 15: 新潟県

https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00200521&tstat=000001136464&cycle=0&tclass=000001136472&tclass2=000001159888&cycle_facet=tclass1&tclass3val=0（2024年12月13日最終閲覧）

国勢調査町丁・字等別境界データセット

<https://geoshape.ex.nii.ac.jp/ka/resource/15/152240640.html>（2024年12月13日最終閲覧）